

第47回 憲法を考える映画の会

「南京!南京!」

手元資料

- 日時 2018年12月8日(土) 13時半～16時40分
- 会場 文京区民センター3A会議室
- 映画 『南京!南京!』 (135分)

- 資料① 『南京!南京!』解説 wikipedia
- 資料② 『南京!南京!』を上映する
- 資料③ 南京大虐殺の概要 『南京!南京!』
- 資料④ 『南京!南京!』解説 人民網日本語版
- 資料⑤ 監督インタビュー (1)(2)(3)(4)(5)
俳優インタビュー
- 資料⑥ 映画上映に寄せて
- 資料⑦ 中国の深い傷跡～南京事件を巡る映画
- 資料⑧ 憲法を考える映画の会からのお知らせ
- 資料⑨ (追補資料)
辺見庸×佐高信「絶望という抵抗」より
- 資料⑩ 『南京南京』陸川監督来日時
トークショー

■12月8日(土)のプログラム

- 13:00 開場(受付準備ができ次第開場)
- 13:30 開会
- 13:40 上映『南京!南京!』(135分)
- 16:00 トークシェア
- 16:40 閉会予定



主催:憲法を考える映画の会



〒185-0024 東京都国分寺市泉町3-5-6-303
TEL: 042-406-0502
ホームページ: <http://kenpou-eiga.com>
E-mail: hanasaki33@me.com
Facebook: 憲法を考える映画の会

資料① 『南京!南京!』解説 wikipedia

『南京!南京!』（なんきん！なんきん！）（英題 City of Life and Death）は、陸川（ルー・チューアン）監督によって製作された中国映画。
日中戦争の南京戦とその後起こったとされる南京事件を題材にした作品。
モノクロで制作されており、南京戦の一連の様子が一日本人の視点から描かれている。

概要

4年以上の歳月をかけて脚本を練り、製作がおこなわれた。陸川（ルー・チューアン）監督は脚本を書くために膨大な数の日本兵の日記を読み、友人が日本で収集した2000冊以上のモノクロ写真集を参考にしたという。そうした史実資料から構想のヒントを得ているものの、陸川（ルー・チューアン）監督は「これは記録映画ではない。戦争での人々の感情を描いた」と述べている。慰安婦のシーンも大きな割合を占めており、監督はこれらのエピソードは大量の歴史的資料の裏づけがあって設定されたと述べている。

本作は日本では公開されていないが、陸川（ルー・チューアン）監督は日本国内での上映を強く希望しており、2009年9月21日、スペインで開催された第57回サンセバスチャン国際映画祭における公式会見の席上で、配給会社が決まり日本公開されることが監督によって明らかにされた。

だが、劇中で使用している楽曲の著作権問題で配給会社との交渉は決裂し、2011年8月21日に史実を守る映画祭により一日限りの上映が行われた。

日本ではDVD化もされていないが、複数の動画サイトで日本語字幕版が配信されている。



反響

2009年4月25日より中国にて、2010年4月28日より欧州にてロードショーが開始される。

戦争の狂気と悲慘さを製作側は意図したため、中国国内では映画中に登場する日本兵の姿に激しい賛否両論を呼んだ。

杭州で催された試写会では、日本人俳優に対し、「日本帝国主義打倒！」や「バカ！」といったのしり声が客席の一部から飛ばされる場面があったが、「彼らは尊敬すべき人たちだ！」という声はるかに多くの観客から上がり、会場は拍手でいっぱいになり、日本人俳優もこれに深い感動をおぼえたという。さらに出演した日本人俳優に対して、「（帰国後の日本からの弾圧を避けるために）今後保護するために中国で暮らしてはどうか」との申し出もあった。

人民網日本語版は「全ての中国人は、南京大虐殺から70数年が経った今こそ、民族史上に受けた苦難をしっかりと心に刻まなければならない」と評論した。

表象文化論学者の劉文兵によると、本作は中国では大きな物議をかもし、特に加害者である日本兵の立場から南京事件を描いた点が糾弾された。劉は観客が痛快なカタルシスを得ることを損なったのが原因ではないかと分析している。

批評

批評家・編集者の夏目深雪は、加害者である日本人の視点を取り込むことと犠牲者に寄り添うこと、通常であれば対立するはずの双方をやり遂げたことによって、リリカルな詩情を保ちながら残虐シーンの見世物化やそれらがイデオロギー性をまとうことから逃れることができている、日本人の観賞に耐えうる作品だと述べている。ドキュメンタリー映画監督の松江哲明は、まるで戦火を逃れた記録写真を再現したかのようなモノクロ映像があまり美しく恐ろしい。特に戦場の狂気に侵される日本兵を演じた中泉英雄の演技が素晴らしく、「反日だから」というような幼稚な理由で一般公開しないのは惜しいと述べている。

フリー・エディター&ライターの大内稔は、日本未公開の表向きの理由は劇中の楽曲著作権問題で日本の配給会社とこじれたためとなっているが、テーマがテーマだけにびびったんだろうと述べている。



出演

陸剣雄：劉燁（リウ・イエ）
姜淑雲：高圓圓（カオ・ユアンユアン）
唐天祥：范偉（ファン・ウェイ）
角川正雄：中泉英雄
唐周氏：秦嵐（チン・ラン）
江香君：江一燕（ジャン・イーイエン）
周曉梅：姚笛
伊田修：木幡竜
百合子：宮本裕子
新聞記者：梶岡潤一
小豆子：劉斌
ジョン・ラーベ：ジョン・ペイズリー

スタッフ

プロデューサー：韓三平
監督・脚本：陸川（ルー・チューアン）
音楽：劉彤
撮影：曹郁
配給：中国電影集团公司

2009年/中国映画/英語題：City of Life and Death
(wikipedia 映画『南京!南京!』より)

資料② 『南京！南京！』を上映する

南京・史実を守る映画祭

2009年12月13日、私たちは「南京・史実を守る映画祭」と題し、南京大虐殺を扱った映画作品の上映会を行いました。南京大虐殺が起きて70年の節目の年に、世界的には多くの映画作品が作られましたが、残念なことに日本での上映はほとんど実現されませんでした。

『YASUKUNI』『ザ・コープ』にみるように、日本には未だ表現の自由に対する攻撃が存在します。南京大虐殺というテーマはその最たるもので、一般の配給会社が尻込みをするのもやむを得ないことだったのかもしれませんが。待てど暮らせど一向に公開されない、ならば我々の手で上映してしまおう、ということでスタートした企画でした。

いくつもあった上映候補の中より、『Nanking』『アイリス・チャン』『南京・引き裂かれた記憶』『チルドレン・オブ・ファンシー』という4本の映画を上映しました。一日に4本の映画上映、その間にシンポジウムを行うという強行スケジュールながら、約900名（延べ）という大勢の方に参加していただき、ひとまずの成功を収めたと自負しています。

陸川監督「南京！南京！」

ところで、2009年の映画祭では、どうしても上映したい映画がありました。それは、陸川監督『南京！南京！』です。陸川監督は、2004年の『ココシリ』でアジア各地の映画賞を多数受賞するなど、中国映画界では大きな注目を受けている映画監督です。その陸川監督が、南京大虐殺をテーマに映画を製作するという事で、『南京！南京！』は製作当初より、中国では勿論のこと日本でも話題となっていました。私たちはある偶然が重なり、陸川監督と交渉することが可能となり、映画祭で上映するため、前向きに交渉を続けていました。途中までは非常に順調に進んだ交渉でしたが、その交渉も大詰めに迫った時、大きな挫折を味わいます。日本の配給会社と交渉が成立してしまい、映画祭での上映不可能となってしまったのです。

再び「南京！南京！」

2009年の映画祭は成功裏に終わったものの、私たちは『南京！南京！』の交渉で味わった挫折感を抱えたままです。一方、陸川監督も同様にモヤモヤした気持ちを抱えていたようです。というのも、一度は決定した日本での一般公開が、結局は上映に至ってなかったからです。

映画祭が終わって一年が経とうかという2010年10月、私たちは仲介の方を介して、陸川監督に意向を打診してみました。その結果、陸川監督は、どうしても日本で上映をしたい、という強い希望を抱いているということです。

私たちはすぐさま陸川監督と交渉を開始し、日本での『南京！南京！』上映を実現させるために協力することで合意しました。そして…、今日、上映に至りました！

「南京！南京！」上映の意義

南京大虐殺の事実を知ってもらう

陸川監督は中国を代表する映画監督であり、『南京！南京！』は国際映画祭で最優秀作品賞を受賞するなど、注目度も世評も高い作品です。この映画を上映することで、普段、歴史認識や南京事件に関心を持たない層に対して、知ってもらう機会となります。

タブーを打破する

南京大虐殺や従軍慰安婦問題は右翼の攻撃対象となりやすく、マスコミではタブー視される風潮があります。敢えて『南京！南京！』という注目される映画の上映することで、このような風潮を打破したいと思います。

メディアウォール

『YASUKUNI』や『ザ・コープ』では右翼の攻撃を受けて、上映中止問題に発展しました。

しかし、マスコミに取り上げられ、広く議論を巻き起こすこととなり、上映が可能となったばかりか、集客宣伝の一助ともなったようです。

ところが、南京大虐殺の映画に関しては、そもそも上映されることもなく、その情報がマスコミに取り上げられることもほとんどありません。日本は南京大虐殺の一方の当事者であり、この問題が世界的に取り上げられているにも関わらずです。

情報を伝えるべきメディアが壁を作り、その存在さえも知られることがない。南京大虐殺問題は、このようなメディアの壁＝メディアウォールの問題とも繋がるものです。世評の高い作品を上映することでメディアウォールを突破すると共に、メディアウォールについても考えていきたいと思います。

作品データ

『南京！南京！』（英題 City of Life and Death）

2009年4月22日・中国・白黒・133分

【監督・脚本】陸川（ルー・チューアン）

【製作】韓三平・覃宏

【撮影】曹郁【美術】郝藝

【出演】劉燁・高圓圓・范偉・秦嵐・中泉英雄・江一燕・姚笛・木幡竜・宮本裕子

【出品】中国電影集团公司・星美影業有限公司・江蘇省廣播電視總台・東亜電影有限公司・上海百量投資咨询有限公司

【製作費】8千萬元（11億5千万円）

【興行収入】25億円（2009年、中国）

【受賞】第57回サンセバスチャン国際映画祭 ゴールデン・シェル賞（最優秀作品）、審査員賞（最優秀撮影監督：曹郁）、カトリック映画賞（シグニス賞）

陸川監督プロフィール

1993年人民解放軍国際情勢部で英語を学び博士号を取得、1998年 北京電影学院監督科で学び映画学の博士号を取得、1998年～現在 チャイナ・フィルム・グループ、クリエイティブセンター長

≪フィルムグラフィック≫2003年 脚本・監督『ココシリ』 2001年 脚本・監督『ミッシング・ガン』

1998年 脚本・TVシリーズ“Blach Hole”

（南京・史実を守る映画祭実行委員会 資料より）

資料③ 南京大虐殺の概要 (1)

南京大虐殺に到るまでの経緯

盧溝橋事件

1931年9月18日の満州事変、それに続く満州国の建国により、中国市民の対日感情は非常に悪化していった。その為、建国された満州国内では抗日ゲリラとの戦闘が頻発し、中国各地では抗日デモやストライキが広く行われ、抗日の機運が高まっていた。その様な中、1937年7月7日、北京郊外の盧溝橋で演習中だった日本軍は何者かに銃撃された為、これを中国軍の行為と断定し、警備中の中国軍を攻撃した。この軍事衝突は、7月11日に停戦協定が結ばれて一旦は終息をみた。しかし、日本は三個師団の中国への増派を決定し、28日、華北の日本軍が中国軍に対して総攻撃を開始した。

■ 第二次上海事変

盧溝橋事件を機に起こった華北地域での日中両軍による武力衝突は、上海での戦闘に飛び火する。1937年8月9日、上海郊外にある中国軍の虹橋空港付近で、日本軍の大山勇夫中尉が中国保安隊と銃撃戦となり、大山中尉は殺害される。この事件を契機に8月13日より上海の攻防をめぐり大激戦となった。上海は、中国の首都・南京の入り口にあたり、また中国最大の貿易・産業地帯として発展していた為、十数万人にもおよぶ中国軍が守備していた。対する日本軍は海軍陸戦隊約4500名が駐屯するのみで、当初の戦闘では劣勢となった。その為、日本軍中央は8月14日に上海派遣軍（松井石根大将、2個師団基幹）の派兵を決定する。しかし、中国軍は蒋介石直系の精鋭部隊を配置するなど頑強に抵抗し、日本軍はさらに苦戦を強いられ、日本軍は逐次的に援軍を送ることになる。9月初旬には、3個師団2個旅団の増派を、10月20日には第10軍（柳川平助中将、3個師団、1個旅団）を編成し、増派した。たび重なる日本軍の増派に、中国軍は戦線を維持できなくなり、11月10日ごろより退却を開始した。日本軍は、退却する中国軍を追って、南京への進撃を開始した。

■ 南京攻略戦

日本軍中央は、戦線を上海地区に限定する方針だった為、制令線を設け戦線拡大を戒めていた。ところが、現地部隊はこの制令線を破り、退却する中国軍を追って南京へ進撃し始めた。上海派遣軍の松井大将は、首都南京を占領すれば中国は屈服すると考えており、南京攻略に強い意欲を持っていた。現地部隊は、11月19日、制令線であった蘇州—嘉興の線を突破した為、軍中央は、改めて無錫—湖州の線を制令線として指示した。しかし、この制令線もすぐに突破され、11月29日は常州に進出した。12月1日、軍中央は当初の方針を変更し、正式に南京攻略の命令を下した。

一方、南京では、11月20日に首都を重慶へ移転することを決定すると共に、南京防衛作戦の方針を決定した。南京の周囲に二重・三重に張り巡らした複郭陣地を構築し、15万人の防衛軍を配備した。

12月8日、日本軍は南京城を包囲し、翌9日、南京防衛軍に対し投降勧告文を飛行機で城内へ投下した。10日午後1時まで回答を待ったが、中国側からの返答はなかった。日本軍は、南京への総攻撃を開始する。日中両軍は12日深夜まで南京城壁を挟んで壮絶な戦闘を繰り広げ、13日未明には城壁を陥落させた。その後、城内外の掃討戦を行い、南京を占領した。



南京大虐殺の概要

■ 定義及び範囲

南京大虐殺の定義・範囲に関しては諸説あるが、もっとも一般的な説明としては以下のように説明されている。

笠原十九司『南京事件』214-215

南京大虐殺事件、略称としての南京事件は、日本の陸軍ならびに海軍が、南京攻略戦と南京占領時において、中国の軍民にたいしておこなった、戦時国際法と国際人道法に反した不法残虐行為の総体をいう。

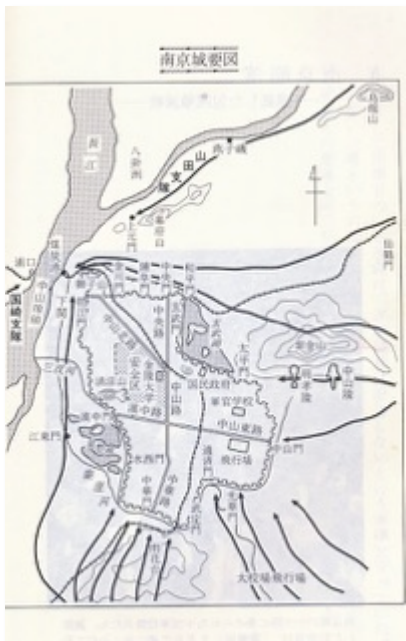
事件発生区域は、南京城区とその近郊の六県を合わせた行政区としての南京特別市全域であり、それは南京攻略戦（中国にとっての南京防衛戦）の戦区であり、南京戦後における日本軍の占領地域でもあった。

事件発生の期間は、日本の大本営が南京攻略戦を下し、中支那方面軍が南京戦区に突入した三十七年二月四日前後からはじまる。大本営が中支那方面軍の戦闘序列を解いた三十八年二月四日が南京攻略戦の終了にあたるが、南京における残虐事件はその後もつづいたので、南京事件の終焉は、日本軍の残虐行為が皆無ではないまでも（近郊農村ではあいかわらずつづいた）、ずっと少なくなった三月二十八日の中華民国維新政府の成立時と考えることができる。ただし、三十七年八月一五日から開始された海軍機の南京空襲は、南京攻略戦の前哨戦であり、市民にたいする無差別爆撃は、南京事件の序幕といえるものだった。

資料③ 南京大虐殺の概要 (2)

■ 捕虜・投降兵殺害

戦時国際法では、戦闘によって交戦者を殺害することは認められているが、投降した者や捕虜となった者を殺害することは禁止されている（例えばハーグ陸戦規則第4条、第23条）。南京事件では、約8万人の捕虜・投降兵・敗残兵が虐殺されたと見られている（前掲書226）。第16師団の中嶋今朝吾中将は陣中日記の中で「捕虜にしない方針」があったことを述べている。将兵の証言からも、捕虜殺害の命令を受けたという。軍の公式文書にも捕虜殺害を明記したケースもある。捕らえた中国軍将兵を捕虜にせず殺害するという方針があったことが、大量の捕虜・投降兵殺害に繋がった一因と考えられる。



■ 民間人殺害

民間人の犠牲者総数を推計することは極めて困難であるが、参考となる資料がいくつか存在する。第一に、ジョン・ラーベのヒットラー宛報告書には次のように記されている。「中国側の申し立てによりますと、十万人の民間人が殺害されたとのことですが、これはいくらか多すぎるのではないのでしょうか。我々外国人はおよそ五万から六万人と見ています」（前掲書226）。ジョン・ラーベはドイツ人であり、ジューメンス社南京支社長で、ナチス党员でもあった。南京陥落後も踏みとどまり、南京安全区国際委員会の委員長として多くの中国市民の保護にあたった。次に、南京の死体埋葬処理に当たった慈善団体の埋葬記録がある。崇善堂は約11万體、紅卍字会は約4万體、紅十字会1万3000體、南京市衛生局埋葬隊は約1万體の死体を埋葬している。この中で、崇善堂と紅卍字会の埋葬記録は、東京裁判でも証拠として提出されている。注意すべきは、これらの埋葬数は軍人の死者数が含まれている上、死体の埋めなおしによる重複も考えられることから、必ずしも民間人の犠牲者数を表すものとは言えない。

社会学者で、安全区委員会のメンバーであるルイス・スマイスは、南京陥落後の1938年3月8日より、南京市部と農村部の被害調査を行った。その結果、市部では7450名（城内および城壁周辺の埋葬資料による1万2000名についても言及）が、農村部では2万6870名の民間人が殺害されたと結論付けた。しかし、この結果についてスマイス自身が「占領軍の報復を恐れて日本軍による死傷の報告が実際より少ないと考えられる理由がある」と述べているように、実際の被害者はさらに多かったと考えられる。

■ 犠牲者総数

笠原十九司氏（都留文科大学教授）の研究によれば、以上のような資料状況と南京での全体状況を勘案すると、南京事件での軍民の犠牲者数は十数万以上、もしくは二十万人に近い犠牲者があったとする。

■ 強姦

安全区委員会のメンバーであるミニ・ポートリンは、次のような出来事を日記に書いている。

「一二月二四日 金曜日（略）一〇時ごろわたしの執務室に呼び出されて、——師団の高級軍事顧問と会見することになった。（略）ここの避難民一万人のなかから売春婦一〇〇人を選別させてもらいたいというのが日本側の要求であった。彼らの考えでは、兵士が利用するための正規の認可慰安所を開設することができれば、何の罪もない憤みある女性にみだらな行為を働くことはなくなるだろう、というのだ。以後は女性を連行しないことを彼らが約束したので、物色を始めることを承知した。その間、軍事顧問はわたしの執務室で腰を掛けて待っていた。かなりの時間が経過してから、彼らはようやく二人を確保した。」（『南京事件の日々』p.77）

南京陥落後の12月16日より強姦事件が頻発し、占領期初期では8000名が被害に遭い、翌年の3月までに数万人の被害者が出たと報告されている（「アメリカキリスト者へのベイツの回状」）。

《参考文献》

笠原十九司『南京事件』（岩波新書）
笠原十九司『南京事件論争史』（平凡社新書）
吉田裕『新装版 天皇の軍隊と南京事件』（青木書店）
岡田良之助・伊原良子訳『南京事件の日々 ミニ・ポートリンの日々』（大月書店）

（南京・史実を守る映画祭実行委員会 資料より）

資料④ 『南京!南京!』解説 人民網日本語版+資料⑤ 監督インタビュー (1)

映画「南京!南京!」は日本の庶民を糾弾するものではない

映画「南京!南京!」の全国ロードショーがスタートした。杭州で催された試写会では、日本人俳優に対し、「日本帝国主義打倒!」や「バカ!」といったのしり声が客席の一部から飛ばされる場面があった。だが、「彼らは尊敬すべき人たちだ!」という声はるかに多くの観客から上がり、会場は拍手でいっぱいになった。日本人俳優もこれに深い感動をおぼえたという。

「南京!南京!」は、中国を侵略した旧日本軍による南京軍民に対する残酷行為を如実に再現した映画だ。時代の臨場感を出すため、あえてモノクロ映画に仕上げられている。陸川監督が語るように、何者も真実から目をそむけることはできない。この映画が人の心を揺さぶり、心の奥に残るものとなるのは、それが真実だからだ。全ての中国人は、南京大虐殺から70数年が経った今こそ、民族史上に受けた苦難をしっかりと心に刻まなければならない。また、日本の侵略者と日本の一般市民とを正しく区別し、南京大虐殺を正しく見つめる日本人の多くがいることを認識しなければならない。この区別を見失ってはならない。

南京大虐殺にかかわった元日本兵の故・東史郎氏が何年も前に、7回にわたり南京を訪れ、南京市民の前に跪いて謝罪した。その行為について、「パフォーマンスにすぎず、物見遊山に來ただけだ」と評する人がいた。これは、自らの行為を反省し、謝罪に來た日本人老人を傷つける発言であり、意識的ではなくとも、南京大虐殺を否定する右翼勢力の宣伝をしているようなものだ。

過去の苦難を心に刻みつけるための必要手段という意味での「南京!南京!」の価値は認めるべきだ。一般の日本人をのしり憎むきっかけとして南京大虐殺を利用すべきではない。この映画は憎しみとは関係はない。

陸川監督は、この映画を中国に捧げると同時に世界にも捧げたいと語った。同時に、日本人に対する中国人観客の態度も世界中に伝わる。世界の人々は、中国人が受けた苦難を十分に認識すると同時に、この映画と日本人に対する中国人観客の態度や心情についても、心に刻むだろう。杭州の多くの観客は、寛容で自信に満ち、自ら精進する中国人精神を見事に見せてくれた。

歴史を心に刻みつけることで憎しみが続く訳ではない。南京大虐殺の真実を暴露した中国人女流作家・張純如女史は、「日本人が特定の時間に特定の場所で行った行為に対する非難を、日本人全体に対する非難にすり替えることは、あの南京大虐殺で命を落とした老若男女を傷つけるだけでなく、日本国民をも傷つけることになります」とコメントしている。このような心の広さと度量は、彼女だけに限らない。映画「南京!南京!」もまた、深く限らない力を内に秘めている。これこそが、成熟した民族が備えるべき度量といえよう。(編集KM)

「人民網日本語版」2009年4月24日



【陸川監督インタビュー】

「南京!南京!」陸川監督：自分がまるで「詐欺師」に話の中によく英語を混ぜる陸川監督のことを「留学帰国」組だと勘違いしている人も多いだろうが、実は、彼は北京で育ち、南京の大学に通った。南京は、陸川監督にとって特殊な意味をもつ。そこでの4年間の生活の中で、数えきれないほどの南京大虐殺にまつわる話を耳にした。軍事学校で学んでいた時、週に2、3回は露天映画を観に行った。「あの頃に観た映画は最悪だった。だから当時、映画の中の人物が涙すれば、観客もつられて泣くような作品をいつか撮りたいと思っていた」。それから何年もの歳月を経て、陸川監督はそれを成し遂げた。「北京娛樂信報」が伝えた。

「南京!南京!」の試写会では、中国の軍人が臨死の直前に「中国は不滅だ!中国万歳!」と叫ぶ姿に涙する観客がいた。映画館から出て來た観客が一言も言葉を発しないというのはこれまでになかったことだ。

「南京!南京!」は22日に公開される。この映画のために、陸川監督は4年以上の月日を費やした。やむを得ず一人で脚本を書き、資金を調達し、「詐欺師」のように撮影チームを結成したことなど映画にまつわる様々な苦労話を聞いていると、陸川監督がこの映画を「カットしたくない」理由がわかる気がした。(編集KA)

「南京!南京!」陸川監督：「ラーベ日記」では足りない

陸川監督は今年38歳になる。2005年に準備に取り掛かってから「南京!南京!」の公開まで、4年の歳月がかかった。

陸川監督は1989年から1993年まで4年間、南京の大学に通った。この4年間に3回南京大虐殺紀念館を参観したという。「ある年の夏休みに弟が遊びに來たので、紀念館に連れて行っった。弟は半分見終わると急に外に飛び出し、壁に寄りかかって泣いていた。このことが強く印象に残っている。紀念館に陳列してある展示品の多くは確かに子供にとってはとても受け入れがたいものだ。私を含め、どんな人でもショックを受ける」と陸川監督は振り返る。

資料⑥ 『南京!南京!』監督インタビュー (2)

「本当にこの映画を撮りたいと思ったのは『ココシリ』を撮影していた時。当時、ゴビ砂漠で次は何の映画を撮ろうかという話題になって、私が南京大虐殺を撮ろうと口にした。当時はただの構想だった」。「ココシリ」を撮影後、南京大虐殺に関する脚本が陸川監督の目の前にあらわれる。「当時、米国の投資側が『ラーベ日記』をもとに書いた脚本をもってきた。ところが資料を調べていると、だんだんこの作品を撮りたくなかった。中国人監督が南京大虐殺を撮るのに、ドイツ人が中国人難民を救うストーリーに濃縮することはできない。南京大虐殺の被害者は中国人なのだから。この傷跡は今でもわれわれ民族の体に残り、痛みもある。単に外国人が中国人を救ったという結末にすれば、このテーマを簡単にしてしまう。だから私は日本の兵士や中国の民衆、特に被害者の角度からこの殺戮と戦争がもたらした傷をじっくり見つめる必要があると思った。それこそが我々の責任だ」。(編集KA)「人民網日本語版」2009年4月22日

「南京!南京!」陸川監督：一人で脚本を手がける

陸川監督はもともと誰かと共同で脚本を書こうと思っていたが、「南京大虐殺はすでに何度も描かれたから、新鮮味を出すのは難しい」といわれ、一人で脚本を手がけることにした。

そうした中、最初の100万元の投資が突然入ってくる。会社を経営する知人の家に呼ばれた時のこと、「私が脚本の中身を話すと、知人はそれに感化されたようで、すぐに現金で100万元を私の車のトランクに運んでくれた。これにはびっくりした」。

許可証が下りる前、陸川監督はなんだか自分が詐欺師のようだったと笑いながら話す。場所を借りて会社らしくし、まるで作戦指揮部のようにして……その後、申請許可が下りなかったり、資金繰りに行き詰まったりするなんて思いもよらなかったという。

「数え切れない人がこの映画の前に推し進めている」。陸川監督は、「お前が踏ん張りさえすれば、周りの人がお前の踏ん張りを見て手を差し伸べてくれ、守ってくれる」という友人の言葉を信じて前に進んできた。

「南京!南京!」は120分におよぶが、陸川監督によると、カットしたくないという気持ちが先立ち、当初はもっと長かったという。「作家の王朔（ワン・シュオ）にみに来てもらった。彼は冷静な映画観賞者だから。（前半部分は南京大虐殺に関する作品の固定パターンを抜けきれていないという見解から）『前半を半分カットすれば世界的な名作だ』という意見が私の思考を前に推し進めることになった」。

(編集KA)「人民網日本語版」2009年4月22日

「南京!南京!」陸川監督：特殊効果に海外からの応援なし

「南京!南京!」は4分の1を占める戦いのシーンに特殊効果を多く取り入れた。すべての特殊効果に8カ月以上費やしたが、陸川監督は資金にもう少しゆとりがあれば、もっと特殊効果を入れたかったという。

「戦場のレクイエム（集結号）」などの大作は海外から特殊効果チームを招いたが、「南京!南京!」では中国人スタッフが担当し、すべての特殊効果と撮影を国内で完成させた。例えば、高円円が演じる役が銃殺されるシーンで、銃声と同時に彼女の髪が揺れるが、このシーンにはコンピュータ処理は施されていない。こういった技術はこれまでの国産映画には見られなかったことだ。

陸川監督率いる特殊効果チームは撮影前の準備期間中、数多くの実験を行い、人が銃撃される実験だけでも1年かけた。準備に使っていた倉庫ではスタッフが毎日、銃に撃たれて倒れる様子を撮影し、陸川監督に見せ、監督と技術スタッフが「これはあまり死んだようにみえない、こっちのほうがいい」などと話し合ったという。また爆弾は、人の顔面や身体、建物のどこで爆発しても真に迫るものに仕上がっている。

陸川監督は「これはごまかしではない。本当に科学実験の結果なんだ」と自信をみせる。(編集KA)

「人民網日本語版」2009年4月22日

「南京!南京!」 屈辱ではなく中国人の栄光を語る映画の大筋：

1937年12月、日本軍による南京攻略が始まった。多くの国民党の兵士が壊走してゆく中、投降を拒否して南京に留まった兵士もたくさんおり、南京のあちこちで絶望的かつ悲惨な抵抗が繰り返された。その中に国民党の精鋭部隊の一員であった陸剣熊もいた。しかしながら抵抗は失敗に終わり、数十万の中国人の血によって長江が染まった後、南京は陥落して死の地と化した……

陸川監督が4年の歳月をかけて作り上げた映画「南京!南京!」のプレミアム上映会が16日、北京で開催された。平均年齢35歳以下の制作チームは、1937年に起こった南京大虐殺に対する若い映画人の思いを映画を通じて表現している。

映画「南京!南京!」の監督が記者のインタビューに応じ、「この作品は屈辱ではなく中国人の栄光を語るものだ」と話した。インタビューの内容は以下の通り。「武漢晩報」が伝えた。

<視点> 単なる方法論であって、わたしの世界観ではない。

記者：「南京!南京!」はどうして日本人の視点から撮っているのか？

陸川監督：まず偏見を捨てて、平常心になってください。これは単なる方法論であって私の世界観を代表するものでも、私の感情でもない。戦争を反省している日本人がいるのかと聞かれれば、「いる」と答えます。その資料をお見せしよう。この点を認めても中国人が損するわけではない。反対に世界からより尊重を受けることになる。これまでの私たちの映画はすべて自分たちの角度から語ったものだった。自己満足に浸っても永遠に外には出られない。

資料⑥ 『南京!南京!』監督インタビュー (3)

記者：今インターネット上で「日本人の弁護をしている」という声があるが。

陸川監督：心底無私であれば天地寛（ひろ）し。まだこの映画を観た人は少ない。あなた方が最初の観客だ。インターネット上の情報は面白おかしいといふところがある。まず情報ルートを買収して、それから世論を誘導する。観衆に対する一種の組織的な誘導であって、正当でない業界競争だ。私だって民族感情を晴らすものを撮ることはできるが、それが何の役に立つのか？ 国に対する思いがなければどうして4年もこの映画に捧げることができるだろう。4年ですよ、大学も卒業できますよ。私たちのこの若いチームはこの国のために何かしたいだけです。

<立場> 屈辱ではなく、中国人のかつての栄光を語る

記者：しかし、映画館に行って再びこの沈痛な歴史に面と向かうよう、どうやって観衆を説得しますか。

陸川監督：私が撮影したのは苦難ではないし、苦難をひけらかしたり、並べ立てたりもしていない。ただ真実を再現しただけだ。私は多くの史料を読み、感動で涙にむせんだ。当時南京の指揮官が逃げても抵抗を止めることなく、いたるところで銃声が響き渡り、日本人は南京城を一步進むたびにお願い代金を支払わなければならなかった。どうして南京大虐殺があったのか？ それは私たちの抵抗が凄まじかったからだ。劉燁（リウ・イェ）の演じた市街戦は本当にあったことだ。私が撮影しなかったら知られることはなかった。これまでの歴史学者は中国人の抵抗を語りたがらないが、どうして屈辱を証明するために抵抗を消し去るのか。これは侵略戦争だ。抵抗したからといって何の権利があって殺戮するのか？ 私はこの事件を掘り返したかった。

この映画は屈辱ではなく、中国人のかつての栄光を語るものだ。抵抗の火種は一度も打ち消されることはなかった。映画の中の一人一人の抵抗が私たちに希望をもたらしてくれる。「愛を読むひと」のプロデューサー・ハーヴェイ・ワインスタイン氏は「南京！南京！」の北京試写会に特使を派遣してきた。本人は香港でこの映画を鑑賞し、買い取ることを約束した。また、この映画を通じて中国人の今日の業績を理解し、この映画は大使のごとく全世界を駆けめぐり、中国人民の勇気と尊厳を人々に知らしめようとして話していた。これまで中国映画は世界にどういったイメージを配信していたのだろうか。

<勇気> ルールに屈するのではなく、自分の撮りたい映画を撮る。

記者：劉燁と高円円（ガオ・ユエンユエン）のラブストーリーをどうしてカットしたのか？

陸川監督：もしそのまま残していたら、もっと映画らしく、もっと伝統的になっていたかもしれない。ラブストーリーもうまく撮れたが、それだと、歴史がこの2人のためにあるようなものだ。歴史が背景となって「タイタニック」のようになる。映画館を出たときに、この2人の愛に涙しているだろうが、この歴史や中国人の運命に感動はしないだろう。

歴史は結局映画のためにあるのか、映画の調味料なのか？ それとも映画が歴史のためにあるのか？ と考え、後でごまかすまいと思った。観衆は4年間甘い汁（4年間の国産映画のこと）を吸ってきたんだから、ここで少々苦汁を飲んで大丈夫だろうと。だからこの映画は勇敢だと思う。一つ一つの出来事であって、メインストーリーがあるわけではない。でもこれは私が30数歳の時にやりたかったことだったからルールに屈することなくやる勇気があった。

記者：映画の結末でどうしてあんなに時間を割いて日本軍の祝賀パレードを表現したのか？

陸川監督：長いですか？ 2分もないですよ。ずいぶん長く感じられましたか？ 実は警鐘を鳴らしているのです。私たちは常に軍国主義を打倒すると口にしますが、軍国主義を見たことがありますか？ この場面がそうです！ ここで表現したかったのは戦争がいかに人の魂をコントロールするかということ。戦争が起こる前には必ず文化によって戦争の執行者への洗脳が行われる。精神の絶対的なコントロールと占領こそが戦争の本質です。戦争の核心的結果は、異なる民族の文化を被侵略者の廃墟の上で踊らせることです。これは私が夢の中で思いついたことです。2007年8、9月に脚本と葛藤しているときにうたた寝をして、うとうとしながらこの場面を夢見ました。

<自分で自分を説得する>

記者：撮影中、日本人俳優を説得するのは難しかったか？

陸川監督：彼らは自分で自分を説得していました。日本の一部の学者、例えば松岡環女史の著作「南京戦・元兵士102人の証言」には映画の中の暴行シーンがすべて描かれている。

私は彼らにこの本を読ませました。私たちの間は契約関係で成り立っています。彼らは自分の役を信じてうまく演じ、私は彼らに演技を強制しません。お互いが納得してから演じます。でなければ私のイメージする鬼のような日本兵になってしまう。彼ら自身が理解し、表現する必要があります。彼らは一人一人が長文の人物像を書き出し、私の方向性を理解しようと努めていました。私たちは協力して楽しく撮影ができました。

インタビュー後記：

陸川監督の最大の望みは「南京！南京！」を日本で上映することだという。同じ題材を扱った「ジョン・ラーベ」は日本で上映禁止となった。

陸川監督によると、日本には映画の上映を禁止できる機関がないため、理論的には「南京！南京！」の日本上陸にはなんら障害はないが、日本の発行元がこの映画を買いとるかどうかが唯一のカギを握っている。

陸川監督と彼のチームは今もこのために努力を続けている。「どんな困難でも撮影に比べればなんてことない。私たちは4年も粘ってきたんだ！」。

陸川監督は「南京！南京！」の冷静さと客観性が、「南京！南京！」を世界の片隅にまで行き渡らせると確信している。（編集KA）「人民網日本語版」2009年4月21日

資料⑥ 『南京!南京!』監督インタビュー (4)

【日本人俳優インタビュー】

「南京！南京！」日本人俳優：日本人居住区に拠点を設定

「南京！南京！」の撮影チームは北京の日本人居住区の敷地内に拠点を構えた。「撮影スタッフのほとんどはこれまであまり日本人と接触したことがなかった。そこに拠点を置いて、日本人と近距離で接触する機会をもった」と陸川監督は説明する。たまにスタッフが敷地内で日本の軍服を試着していると、そこに住む日本人が急ぎ足で去っていったり、レストランで食事をしながら「南京」にまつわる話をしていると、周囲の日本人から変な目で見られたりしたという。「北京娯楽情報」が伝えた。

「最初、スタッフたちはビクビクして忍び足になっていたが、だんだん気にしなくなった」と陸川監督は当時を振り返る。「私たちは日本人に隠れて悪いことをしているわけではないんだから、彼らの前で当時の歴史を誠意を持って率直に話しても当然構わない。歴史に目を向けることは勇気のいることだ」。

陸川監督は日本人俳優を探しに東京に行った際、多くの写真や資料を持参した。東京では3日で60人以上の俳優と会ったという。「少なくとも私が会った日本人俳優は、心に抱いていた気がかりを打ち消し、当時の歴史を信じるようになった」。陸川監督は日本人俳優の選考について、「映画に出演したのは私が2回目に日本で選んだ俳優で、1回目に選んだ俳優はみんな辞退した。出演したのは第一線で活躍する俳優ではないが、演技はなかなかだ。最初に選んだのは中国でもお馴染みの俳優だったが、プロダクションが許可しなかった」と話す。(編集KA)

「人民網日本語版」2009年4月23日

「南京！南京！」日本人俳優：強姦シーンで女優に触れない

「こんな映画の撮影で東京に呼ばれても、私だったら絶対にできない。1千万元くれても行かないよ。私だったら耐え切れない。でも彼らは今ここにいる」。

作品中の大部分の演技は陸川監督と日本人俳優が相談しながら撮影したものだ。あるシーンでは子供が日本人に絞め殺される。このシーンを撮影した後に日本人俳優は陰に隠れて泣いていたという。「もう耐えられない、家に帰りたい」と。「私が招いた日本人俳優は9カ月も私につきあってくれた。もし同じようなことを私本人に要求されても、例えばこんな映画の撮影で東京に呼ばれても、私だったら絶対にできない。1千万元くれても行かないよ。私だったら耐え切れない。でも彼らは今ここにいる」。

強姦シーンを撮影する際、日本人俳優は女優の体にどうしても触れなかった。陸川監督は彼らに言った。「君らが演じないなら、この女の子たちはずっと裸のままではいなければならない」。そして撮影が終了し、監督が「OK」と叫ぶと、日本人俳優はすぐさま女優たちに服を渡してお辞儀をしたという。「この一部始終を私は目にした」と陸川監督と語る。(編集KA)

「人民網日本語版」2009年4月23日

『南京！南京！』の試写会で日本人俳優が涙

ある観客が日本人俳優の中泉英雄さんに、この映画に出演した気持ちをたずねた時だった。会場からは「打倒帝国主義」や日本語で「バカ」と罵る声が上がった。中泉さんは少し気まずそうな表情を浮かべて黙りこみ、会場の雰囲気为重くなった瞬間、「日本人の俳優に対してこんなふうなのはよくない」や「彼らは尊敬すべき人だ」、「彼らは勇敢です」と観客が叫び、熱烈な拍手が送られた。そして拍手が鳴り響く中で、「ありがとう日本の友人」と日本語で叫ぶ若い観客までいた。拍手の音は止まらなかった。『南京！南京！』の出演者たちは感動し、中泉さんも通訳の人から中国の観客が言った言葉を聞いて涙を流した。

休憩室に戻った中泉さんが突然激しく泣き出したため、映画館の責任者が嫌な思いをさせたと謝ると、「違います。私は中国や中国の人たちがすばらしいと思ったのです。侵略も戦争もしてはいけません。永遠にしていけないのです」と中泉さんは言った。

「チャイナネット」2009年4月22日

役決め：小豆子は一枚の写真がもとに

「南京！南京！」はモノクロ画面で、すべての主役には原型がある。「モノクロの画面では血は黒い」と陸川監督は語る。この題材を撮りたい他の中国人監督と比べ、彼の最大の強みは膨大な数の日本兵の日記を読めたことだという。「樊建川という私の友人が、自分の貯金をはたいて28の博物館を建てた。そのなかに全国最大の抗日戦争の写真館があって、50万枚以上のモノクロ写真が収められている。すべて彼が日本で買ってきた写真集だ。2000冊はあるだろう。その頃から彼は私がやりたいことを知っていて、無料で博物館を開けてくれた」。作品に出てくる日本人兵士の角川という役は、多くの日本兵の日記をまとめて作り上げられた人物だし、高円円演じる姜淑雲は中国人教師の足跡をまとめた人物だ。ある日、偶然目にした一枚の写真が陸川監督を震撼させる。「それは少年兵の写真で、彼の名前は李万方。数え切れないほどの水筒とコップを背負っていた。日本軍に捕虜にされた最年少の兵士だ。この写真を見て心が締めつけられた。だからリュウ・イエの傍にこの人物を描いた。それが小豆子だ」。

映画の中ではどのエキストラの顔も真に迫るものがある。「この映画では、中国人の顔を二度とぼかしたくなかった。中国人がただ殺されるだけというイメージから、南京大虐殺を題材にした映画を見たくない人も多い。私たちは埋没した事実を特に表現したかった。70年経った。今ここで30万人の犠牲者のうち3人の名前をあげてみてください。3人といわず、一人もあげることができないでしょう。数十万人の代価が支払われたのに、最終的には一人の名前も残っていない」「毎回撮影現場では、昔の写真をもとに1000人以上のエキストラの中から私たちがこれだと思う中国人の顔をじっくり選んだ。撮影の度に2、3時間はかかった」と陸川監督は語る。(編集KA)

「人民網日本語版」2009年4月23日

資料⑥ 『南京!南京!』監督インタビュー (5) +俳優インタビュー

【制作状況：スタッフが発狂】

「南京!南京!」の撮影期間中、陸川監督は3回盲腸炎にかかって入院したが、毎回点滴と薬で治療してきた。3回目の盲腸炎は長春での撮影中にかかった。当時、撮影しながら城壁の外にある堀に倒れ込み、スタッフが振り向くと「監督が消えた」ということがあった。

こういった生理的な痛みのほかに、陸川監督は心理的なプレッシャーにも耐えなければならなかった。「私の役目はいかに人をはぐらかすか。人が崩壊しないように」と監督は笑いながら話す。

「チームのメンバーの多くが発狂していた」。撮影が長引き、心理的にも、生理的にも耐え切れなくなる人が多かったという。例えば高円円について監督は「私が見ても彼女はちょっと怖かった。こんなに善良で、若々しい天使が魔女のようになっていた。誰かを捕まえてはケンカを売り、顔をゆがめていた。かなり不安定な状況だった」と語る。監督はこのことに非常に心がとがめているという。

「南京!南京!」の撮影が終わると、キッパリしていた監督がもろくなったという。この映画を見るたびに涙を流し、今でもなかなか見る勇気がない。気持ちが脆くなったほかに、監督の趣味も戦争への関心からミュージカル映画に変わり、前までは戦争ゲームが好きだったが、「銃声が耳にさわる」ことから今は戦争ゲームを全部削除したという。陸川監督が次に撮るものは決まっていなかったが、「とてもシンプルに素敵なことを表現したい」という。(編集KA)

「人民網日本語版」2009年4月23日

「南京!南京!」を通して見る陸川監督

映画の最後に「小豆子は今でも生きている」という字幕があらわれると、隣に座っていた大きな体つきの男性が、「ジーンときた」と語った。

陸川監督自身も特にリュウ・イエの役が銃殺されるシーンで涙が出るという。監督はこの映画を1万回以上見ているが、そのシーンになると毎回泣いてしまう。もしかすると監督にも他の少年と同じように戦場で敵と戦ってみたいという夢があるのかもしれない。だから監督は「南京!南京!」の市街戦の撮影にこだわり、劉燁が扮する人物を「陸」と名付けたのだろうか◆?

陸川監督の映画は非常に冷静で、冷酷にさえみえるが、彼は感情の豊かな人のような。でなければ「ココシリ」のために精魂捧げ、「南京!南京!」のために4年も没頭するはずがない。インタビューを終えてからここ数日、監督の言った一言が私の耳から離れない。「価値があると思う作品を撮らないなら、4年という時間を使って何をやるんだ? だったら好きな相手を見つけて子供を産んだほうがましだ!」。

陸川監督は商売上手な映画人ではない。彼はまるっきり市場を知らないし、市場的な角度からどの映画を撮るか考えていない。彼の言葉を借りれば、それは提携先が考える問題ということになる。だから監督が題材を選ぶ時には彼に衝撃を与え、彼を熱くし、彼を感動させるものだけに集中する。「ザ・ミッシング・ガン」もそうだし、「ココシリ」もそうだし、「南京!南京!」もそうだった。監督によって好みや関心を向けるものは違うが、陸川監督は「簡単かつ荒々しい」力が、いまだに人々を震撼させることに注目する。

この力によって陸川監督はだんだん脆くなり、よく涙を流すようになった。監督はこの映画を最後まで撮り切れるとは思ってもしなかったと明かす。「私たちならできる」「この映画は完成する」と毎日人には言っていたが、彼自身どうなるのかわからなかったという。「あなたには私のあの絶望感はわかりませんよ。スタッフが毎回翌日の計画持ってくるたびに、目をつむってサインしていた……6月15日に完成した途端、撮影チームのみんなが泣き崩れた」と振り返る。

陸川監督は「どの監督でも某年某月某日に手もとが狂う。これは私たちの宿命です。わたしにもその日は来るが、それはこの作品ではないし、ましてや次の作品ではないと信じている。それは働き盛りの若い時であってほしくない」と語る。(編集KA)

「人民網日本語版」2009年4月23日

江一燕：涙の日本人俳優を励ます

女優・江一燕は映画「南京!南京!」の中で、強情な性格の売春婦・小江を演じた。平和な時代にも人から卑下されていた彼女は、戦時中でも同じく無力な存在だった。しかし彼女は、日本軍がやってきて中国人女性を慰安婦として100人集めると言ったとき、真っ先に手を上げ、他の人の代わりに自ら犠牲となった。

この小江には、モデルとなった人物がいる。南京大虐殺を体験した米国人Minnie Vanttrinさんは日記の中で、「日本人は彼女のいた学校にやってきて、女性を無理やり連れ去ろうとした。さもなくば負傷兵の捜査を理由に安全区に立ち入るところだった。このとき、数人の売春婦が自発的に立ち上がって彼らと共に去った」としている。

江一燕は最も遅く撮影チームに参加した俳優だ。彼女の役・小江はもともと、他の女優が演じることが決まっていた。しかし、(売春婦という役どころもあり、)家族が強烈に反対したことから、最終的にその女優はその役をあきらめたという。

資料⑥ 『南京!南京!』俳優インタビュー

江一燕は「南京!南京!」のオーディションに1度落ちたことを隠さない。「最初に監督が私の会社を訪れて俳優を選んだとき、私は選ばれませんでした。監督は私のことを、高校生のようなと思ったそうです」。しかし江一燕は落選後、思いもよらず陸川監督からのショートメールを受け取る。「内容は簡単でした。『南京!南京!』のなかで強情な売春婦の女の役があり、米と身代わりに自分が（慰安婦になり、）犠牲になったと。陸川監督は、『君の眼から意思の強さを感じたのを覚えている。演じてくれないか』と言ってくれました。私はやってみるべきだと思います」。

映画「南京!南京!」の撮影が終わった後、江一燕は半年以上をかけて様々なところへ旅行へ出かけた。旅の途中、たびたび悪夢から目覚め、窓の外の太陽の光を見たとき、今という時代は本当にいいなあと感じたという。

江一燕は撮影を振り返り、「日本人の役者との共演中はずっと、複雑な気持ちを感じていました」と語る。役に入り込むあまり、撮影以外のときでも日本人俳優と話をすることはなかったという。しかし最近、杭州で舞台挨拶をしたとき、客席から日本人俳優に罵声が飛び、角川役を演じた中泉英雄さんが舞台の裏で号泣するという出来事があった。「私は彼にティッシュを渡し、励ましました。彼はあまり流暢ではない中国語で、『ずっと平和が続いて欲しいと思います・・・』と言いました。それを聞いて私も一緒に涙しました。あれが、撮影開始から今まで、彼との1度きりの会話です。』

江一燕はまた、「日本の若者に72年前の罪を背負わせるのは不公平です。『南京!南京!』が、両国の人々、さらには世界にとって交流・反省のきっかけとなり、平和への期待につながれば、それこそ私たちがこの映画を撮影した本当の願いです」と語った。（編集SN）

「人民網日本語版」 2009年4月24日



資料⑥ 映画上映に寄せて

映画上映に寄せて

■笠原十九司さん（都留文科大学 名誉教授）

日本の中学校と高等学校の歴史教科書のすべてに記述され、日本政府も公式に事実を認めている（外務省のホームページを見よ）南京虐殺についての映画が、日本の映画館で一般上映できない日本は、国際社会から見ればとても恥ずかしい国であり、誇ることはできません。

そうしたなかで、今回の「南京！南京！」上映会は、日本人の“良心の灯”といえます。今回灯される“一つの灯”が、やがて全国にも広がっていくことを願ってやみません。

■長沼節夫さん（ジャーナリスト）

こぶしを振り上げ激しい言葉で語るよりも、相手の目を見ながらゆっくり静かに話すほうが説得力を増す。鮮やかなカラー映像で戦闘や虐殺シーンを見せるよりも、一見地味な白黒映像で見せるほうが落ち着いて歴史的を考察させる。

ドグマは振りまくよりも抑制したほうがかえって観客を、より真実を見ている思いにさせる。陸川監督がもし、はじめからその効果を狙ってこの映画を作ったとしたら、私たちは彼の術中に見事にはまったことになる。

かつての中国映画だったら日本兵はあくまでも「日本鬼子（リーベン・クイズ）」らしい形相で、国民党軍は共產軍と対照的に意気地無しに描いただろう。しかし監督は我々の意表を突いた。

形相すさまじい日本兵だけが残虐だったのではない。あのとき南京では、分別盛りの男たちもまた極悪非道の行為に走ったのだ。

日本人インテリ将校は中国側に「手荒なことはしないから女を100人供出してほしい」と一見紳士的に、

（だから一層厚顔無恥に）慰安婦を要求したのだ。仲間が蹂躪されるくらいなら私ごと、1人また1人と手を挙げてゆく女子学生。日本人は監督の静かな問題提起を勇気を出して正視しなければならない。上映に反対する日本人が居るとしたら、実に恥ずかしい。この映画の全国上映を願う。それが民主主義の証しとなる。



鈴木邦男さん（一水会顧問）

反日映画だと思っていた。初めて知らされたこともあった。この映画をもとに南京事件を考えていくと良い。日本人とは何か、戦争とは何かを考える良いテキストになる。目をそむけてはいけない。



姫田光義さん（中央大学 名誉教授）

「映画『南京!南京』を観る」 この映画の英文タイトルは「The city of life and death」（生と死の街）である。市街戦や捕虜の処刑、そして自殺などの大量の死は身近で簡単に訪れるのに、ごく少ない生は遠く至難だった。

その少ない生を、ドイツ人ラーベ、アメリカ人マギー、そして中国人など、どれほど多くの人々が万難を排して確保しようとしたか、そしてそれがどれほど大きな犠牲を払いながら失敗していったかが克明に描かれ、日本人としては正視するに耐えられない心痛を感じてしまう。

このように映画自体は基本的には歴史事実に忠実に「南京大虐殺」を描いているが、非情残酷を強調して反日感情を煽るのではなく、侵略者の日本人の中にも虐殺を疑問視し良心の呵責に苦悩する者がいたことを印象付けているところが、これまでの南京モノと一味も二味も違った作品である。

その日本人憲兵は明らかに現代人の視線から創造された存在であるが、日本人自身からすれば贖罪意識を表し、中国人側からすれば日本人への期待を表すメッセージであろう。

その二重のメッセージ性に、この映画の作者の意図があったように思われた。もしそうだとすれば、南京「大虐殺」を否定したがる日本人、逆に「大虐殺」の側面だけを強調して反日を主張する中国人の双方に、是非とも観ていただいて（当然、双方向の逆批判がありうるのだが）このメッセージに込められた中国人の善意と希望とを理解していただきたいものだと思うのである。

（南京・史実を守る映画祭実行委員会 資料より）

資料⑦ 中国の深い傷跡～南京事件を巡る映画 (1)

『南京1937』(1995年・中国/香港/台湾・110分)

『南京1937』(原題: 南京大屠殺)は、1995年に製作された中国・香港・台湾合作の映画。日中戦争中の1937年に起こったとされる南京事件を描いた作品。日本人俳優も出演している。日本での公開は1998年5月2日。日中戦争のさなかの1937年、中華民国の首都南京へ中国人・日本人の夫婦・親子が帰ってくる。やがて南京も日本軍によって陥落する。日本軍は降伏した中国軍の将兵を虐殺、難民区に避難した南京の婦女子を夜な夜な襲う。難民区の管理者は必死に抵抗するが、ある晩ついに…。

監督の呉子牛は様々な作品を手がけ、本作品は日中友好を願う中国側の機運の中で製作された。中国ではこれ以前にもこれ以降にも南京事件を描いた映画は多いが、本作は公開当時、それまでで最も制作費が大きく、平和的な作品であったため、中国ではあまり評価が高いとは言えない。日本での公開に際しては右翼団体による上映への抗議や妨害行動があり、上映期間を短縮して打ち切った映画館があったほか、上映を企画していた市民団体が自治体から上映目的の施設使用を一時拒否される事態も発生した。



『金陵十三釵』(2011年・中国・145分)

『金陵十三釵』(きんりょうじゅうさんさ、英語題: *The Flowers Of War*)は、2011年公開の中国映画。張芸謀(チャン・イーモウ)監督作品。日本未公開。題名は『紅樓夢』の『金陵十二釵』に由来する。南京事件を題材としたフィクション作品で、中国映画史上最高額となる製作費6億元(約78億円)を投じた超大作であり、2011年の中国の年間総興行第1位(約71億円)と大ヒットし、中国社会に大きな影響を与えた。第84回アカデミー賞外国語映画賞中国代表作品。

舞台は日中戦争下、1937年の南京。南京へ侵攻してきた日本軍から迫害を受け教会の建物の中へ逃げ込んだ中国人女子学生ならびに娼婦らを米国人納棺師ジョン(クリスチャン・ペール)が聖職者になりきり匿い救う。日本軍士官長谷川は女学生たちを保護する約束をするが、同時に彼女等がパーティーで賛美歌を合唱するよう要求する。女子学生たちを助けるために、一緒に避難していた12人の娼婦と1人の少年侍者が女子学生に扮装し身代わりとして日本軍の南京陥落パーティーに赴き、その際にジョンは修理された教会のトラックと密かに入手した通行証で女子学生たちを南京から救出する。

『ザ・バトル・オブ・チャイナ』(1944年・アメリカ)

フランク・キャブラが監督したプロパガンダ映画『我々はなぜ戦うのか』シリーズの6作目である。1944年(昭和19年)にアメリカで上映された。戦争当事国の中華民国をはじめ、欧米や中華人民共和国などではニュースや報道番組において、現在でも日本軍による残虐行為の記録フィルムや記録写真として、これらの映画の一部が頻繁に使用されている。

『ザ・バトル・オブ・チャイナ』は、このシリーズの6作目にあたり、シリーズ7作中で唯一、アジアにおける戦闘を題材にしたものである。1944年にアメリカで、一般に劇場公開された。数人の評論家から問題点(内容に誇張が多い・中国人自身の問題に全く触れていない)を指摘されたことにより、一時的に回収されたが再度上映され、戦争終結までに約400万人が観ることになった。スタンフォード大学歴史学部長のデビッド・ケネディは南京大虐殺は反日プロパガンダの中核となり、この映画はその顕著な一例であるとしている。



『中国之怒吼』(1945年・中国(国民政府))

『中国之怒吼』(中国語題: 中國之怒吼)

「中国の怒吼」は、1945年(昭和20年)秋頃に、アメリカ製の映画『ザ・バトル・オブ・チャイナ』を編集・追加して中国(国民政府)で作られたプロパガンダ映画である。南京事件の証拠写真・映像として、この映画のシーンが使用されることもある。

長崎原爆資料館では長崎の中国総領事館が「南京大虐殺の写真」を展示することを要求したことで、資料館は圧力に屈してこの宣伝映画の1コマをプリントして「泣き叫ぶ婦人の連行写真」として展示していたことがあったが、結果的に「信憑性に乏しい」と判断され撤去するに至っている。

また1983年(昭和58年)に公開された記録映画『東京裁判』(小林正樹監督)の中でも南京事件を説明する映像として、この映画の一部が使用された。それについて渡部昇一から「やらせ」を指摘され、小林監督は「確かに、あれは中国・国民政府が南京事件を告発するためにつくった映画のフィルムであり、いわゆるやらせがかなり多いことも、最初からわかっていました」と述べる一件も起こっている。上海南駅での子供を映したシーンでは「炎炎筒」を炊いて演出しているのではないかと指摘されている。

資料⑥ 中国の深い傷跡～南京事件を巡る映画 (2)

『チルドレン・オブ・ホアンシー 遥かなる希望の道』

(2008年・オーストラリア/中国/ドイツ・125分)
『チルドレン・オブ・ホアンシー 遥かなる希望の道』(はるかなるきぼうのみち、原題: *The Children of Huang Shi*、中国語題: 黄石的孩子)は、2008年制作のオーストラリア・中国・ドイツ合作映画。ロジャー・スポティスウッド監督。

1930年代の終わり、日中戦争の戦火が南京から黄石(ホアンシー)に迫ったことを知り、中国人孤児60名を連れてシルクロードを横断した英国人記者ジョージ・ホッグ(英語版)を主人公とした映画。
日本では2009年2月にDVDが発売された後、2009年12月の「南京・史実を守る映画祭2009」で上映された。

1937年、日中戦争が勃発した。上海租界に滞在していたイギリス人ジャーナリストジョージ・ホッグは、日本軍が進撃した南京を取材するため、赤十字の人間と身分を偽って南京に潜入する。そこで大勢の市民を殺害する日本軍の姿を目の当たりにしたホッグは、それをカメラに撮影するが、日本兵に見つかってしまう。
処刑寸前のところをジャックという中国共産党の軍人に助けられたホッグは、ジャックの友人である看護婦のリーの紹介で黄石のとある施設に赴く。そこには60名もの中国人孤児がいた。

『ジョン・ラーベ 南京のシンドラ』

(2009年・ドイツ/中国/フランス・134分)
憲法を考える映画の会ホームページ「ジョン・ラーベ」
<http://kenpou-eiga.com/?p=366>をご参照ください



『南京』(英題: NANKING)

『南京』は、アメリカ合衆国製作で2007年に公開された南京事件に関するドキュメンタリー映画。中国で『南京』、台湾で『被遺忘的1937』(忘れられた1937)の題名でも公開された。日本では2009年12月13日の「南京・史実を守る映画祭2009」で上映された。
1937年末に旧日本軍が南京を占領した様子が、西洋人の視点から描かれている。映像では生存者の証言を集めたほか、当時ドイツ・ジューメンス社の南京支社長として赴任していたジョン・ラーベや米国女性教師ミニ・ヴォートリンなどが、南京に南京安全区を設立して住民20万人以上を虐殺から保護した行いを、ヨーロッパにおいてユダヤ人をホロコーストから救ったドイツ人実業家のオスカー・シンドラにちなみ、「中国のシンドラ」と位置づけている。

また監督の2人は、中国および日本において80人におよぶこの事件の生存者を探し回り、そのうちかなりの人数がこの映画に実際に出演している。

『南京 引き裂かれた記憶』(2007年・日本・85分)

『南京 引き裂かれた記憶』は、2007年制作の日本のドキュメンタリー映画。
約10年をかけてインタビュアー自らの足で探し出した南京大虐殺の中国人被害者や加害者の元日本兵500人以上を取材した中から、7名の証言を取り上げて制作したドキュメンタリー映画である。
2009年12月の「南京・史実を守る映画祭2009」でも上映された。
監督・編集: 武田倫和
撮影: 松岡環、林伯耀、武田倫和
製作会社: ノマドアイ、日中平和研究会



『天皇の名の下に』(1995年・50分)

1937年12月の南京大虐殺とは何であったのか? 当時、南京に滞在していた米国人ジョン・マギー牧師は、密かに16ミリフィルムを回しその実態を記録していた。深傷を負って南京病院に運び込まれた人々、黒焦げの死体、強姦された女性、目を覆うシーンが続く。
アジア系米国人のクリスティン・チョイさんとナンシー・トンさんは、92年から3年の歳月をかけて、映像資料の発掘と百人近いインタビューを行なった。約50分の映画の骨格は、マギー牧師の貴重なフィルムだ。それに、当時のニュース映像や虐殺に加わった元日本軍兵士、生き残った中国人の証言、南京に住んでいた外国人の日記などを加え、南京大虐殺を様々な角度から検証している。この事件をめぐる日本の論争にも一石を投じるものである。
このフィルムは95年に完成したが、日本で公開できなかった。NHKは内容を見て「刺激的すぎる」と放映を断ったという。今回、関係者の努力で南京大虐殺60周年にあわせて、ビデオの日本語版が制作された。現代史を知らない日本の若者にとっても、必見の作品である。
TBSニュース23でも「ラーベの日記」と併せて、このビデオ映像が取り上げられ、全国的に反響が広がっている。
監督 クリスティン・チョイ/ナンシー・トン
この作品には、南京戦に参加した元日本軍兵士(東史郎・上羽佐一郎・永富博道)をはじめ、ソン・シンダー、家永三郎、藤原彰、吉田裕、本多勝一、吉見義明、西野瑠美子、大沼保昭、渡部昇一などの各氏も登場している。(wikipediaより)り

資料③ 「憲法を考える映画の会」からのお知らせ

これからの「憲法を考える映画の会」

第48回 憲法を考える映画の会

日時：1月27日（日）13：30～16：40

会場：文京区民センター3A会議室

映画：未定

候補として韓国のドキュメンタリー映画『わたしの描きたいこと 絵本作家クォン・ユンドクと「花ばあば」の物語』も候補に挙がっています。この映画は「日本軍『慰安婦』被害者の証言をもとにした物語を絵本で世界の子供たちに伝えようと苦闘するクォン・ユンドク。しかし、完成した『花ばあば』は日本で出版不可とされた」とDVDジャケットにあります。またご案内します。

（93分/2012年制作/韓国映画/クォン・ヒョ監督作品）

第49回 憲法を考える映画の会

日時：2019年3月予定

プログラムも会場も、まだ未定ですがメキシコ映画『天から落ちてきた男』の日本語版初公開が候補になっています。

この映画は、軍事政権下に起きた忌まわしい事件の裏側であった信じがたい実話の真相を解き明かしていくスリリングなドキュメンタリー映画です。（80分/2016年制作/メキシコ映画/モデスト・ロペス監督作品）

映画の詳細は『天から落ちてきた男』サイトで。

<http://caido.latinamerica-movie.com/>

この映画も、『グラニート』『500年』と同様、日本語版完成後、憲法を考える映画の会での上映、およびDVDの販売を予定している作品です。

第46回映画の会「OKINAWA1965」報告

11月3日（土）に映画『OKINAWA1965』を見て、映画の後、話し合いの機会をもちました。当日はこの映画にも登場している報道写真家の嬉野京子さんにトークシェアに参加していただきました。トークは映画会の参加者の感想を出し合い嬉野さんへの質問を聞くところから始まりました。スマホで誰でも現場で写真を撮る状況での写真家の役割、安田純平さんの自己責任論に対して、嬉野さんの考えを尋ねる質問がありました。嬉野さんはプロのカメラマンとしてやらなければならない役割があること「自分としては自己責任論で自由に動くことを求める」と答えられました。1965年、沖縄に入るには、教育、宗教、報道関係者に許可が下りなかったこと。それらは「伝える相手を持って」「聞く側と伝える側の信頼関係」がある職業であること、つまりアメリカ軍政部としては、沖縄の現状、そこでどのようなことが起きているかを知られることを嫌がった「軍や権力側は隠蔽、捏造しても『知らせないこと』に力を尽くす。だからこそ知ること、知らせる役割のメディアの重要性がある」と話されました。韓国のキャンドル革命の時のメディアの活躍の例などから、いま、マスコミの沖縄報道はどちらを向いているのか、またメディアの報道自体が沖縄の分断を進めるといふ点にはまっぴりかいという意見も出されました。

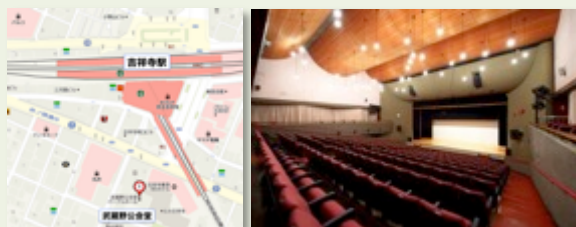
憲法映画祭2019の準備

来年の憲法映画祭の日程と会場が決まりました。

と き：2019年4月27日（土）28日（日）

ところ：武蔵野公会堂（吉祥寺駅南口2分）

350席の会場です。上映作品、テーマ、プログラムや時間割等はこれから検討します。



私たちの憲法映画祭は、来年で4回目になります。憲法を考える映画の会の上映会も、来年1月、3月と会を重ねることができれば4月にはちょうど50回目になります。

私たちは、第二次安倍政権が出現し、改憲を言い出した2013年4月から「安倍政権によって改憲を許してはならない」との思いから「憲法を考える映画の会」を始めました。

しかし「戦争できる国」や改憲の準備とも言える秘密保護法、安保法制、共謀罪法を強行させてしまいました。そして今開かれている、国会で改憲案を説明、通常国会で自衛隊9条加憲改憲案を上程と、国民投票のスケジュールまで言われるところまで来てしまいました。

そうした改憲の動きを許さないためにも、この憲法映画祭を意味あるものにし、その力を拡げて行きたいと思っています。

関連映画上映情報

これまで私達が上映した映画の新しい上映会情報です。

「憲法を武器として」上映会

と き：① 2018年12月22日（土）14時～

② 2019年1月13日（日）14時～

③ 2019年1月27日（日）18時～

（第48回憲法を考える映画の会後の時間です）

ところ：文京区民センター 3A会議室

映 画：「憲法を武器として 恵庭事件知られざる50年目の真実」

ゲスト：内藤功弁護士（恵庭事件弁護団 元参議院議員）

参加費：1000円

主 催：タキオンジャパン090-3576-6644

「自衛隊加憲」などとまやかしの改憲が進められる中で、恵庭裁判の裁判の中で自衛隊違憲が論じられたことは大きな意義がありました。裁判の弁護団の内藤さんのお話も聞くことができます。是非「憲法」を武器としましょう。

自己申告する歴史と見られた歴史

辺見 先日、陸川という中国人の映画監督の『南京！南京！』を見ました。二〇〇九年の作品ですから、最近の情勢を受けてつくられた作品ではありません。ぼくは感銘しました。出来がいいんですよ。これにはまいりました。南京大虐殺を映像化してしまっただけです。これは日本の学校で見せるべきだと思いましたね。

てっきり日本で公開されたものだと思っていたんですけど、試写と小さな劇場で一度、上映したきりでした。難癖をつけて映画館が断ってしまうようですね。日本人の俳優が数人出演していて、本人たちも緊張したそうですし、だいぶ批判もされたらしいです。なぜ日本でこの作品を上映できないのか。まず右翼が怖い。嫌韓・嫌中の世の中で、トラブルが起きるのではないかと萎縮している。こんなにもつたないことはないですよ。

佐高 辺見さんはどこで見たんですか。

辺見 YouTubeで全編見ることができました。調べものをしていて脱線したんです。あまりにおもしろくて、最後まで見てしまった。

陸川監督は製作したとき、三九歳でした。戦争も文化大革命もまったく知らない世代です。イケメンの中国の若手監督が、南京大虐殺をスタイリッシュに撮った。つまり、厚塗りのリアリズムではないんですよ。我々がずっと見てきた中国の反日プロパガンダ映画とは違う。主人公の兵隊の視点で南京大虐殺が描かれているのですが、驚

くべきことに、主人公は日本人です。被害者側からでなく加害者側から見るという、ひねりが加えられている。そして、主人公の兵隊は最後に拳銃自殺をする。たいへん始末がいいとも言えるんですけども、ぼくが驚いたのは、その余裕です。歴史を映像化する際の、距離の置き方、設定と想像力の余裕に圧倒された。

新聞やテレビから見えてくる中国は、ベトナムやフィリピン領を我がもの顔で航行し、食品の偽装が相次ぐ、とんでもない国に映ります。しかし、実際の中国の民衆文化には瞠目に値するものがあるなと思いました。

佐高 前に辺見さんがおっしゃっていた、魯迅の子孫のような表現者の一人ということかもしれません。『南京！南京！』は一部の週刊誌で騒がれましたね。大つばらに評価されてはいませんでした。

余裕について思い出したことがあります。石川好が日本の漫画家の戦争体験をテーマに、南京で「私の八月十五日展」をやって、たいへんな評判になりました。日本人がこういう戦争体験をもっているとは知らなかったと、現地の中国人から大きな反響があった。南京をはじめ、五つくらいの都市を展覧してまわりましたが、日本ではあまり報道されませんでしたね。

辺見 自己規制でしょうね。日本と中国、一体どちらに表現の自由があるのかと、疑わしい気持ちになります。もちろん『南京！南京！』には中国当局の検閲が入っていると思います。検閲を意識してつくられているようにも見えます。しかし、かなり自由ですよ。ぼくが中国の検閲当局者だったら、すこし日本に肩入れしすぎではないかと思うでしょう。日本人は南京で悪いことをしたって、自殺なんてしないですよ。実際に誰も自殺していません。ところが、日本人が良心に耐えかねて自殺したと設定した。レイプシーンもありますが、ぼくから見ると甘い。実際はもっとひどいことをやっていたと思いますが、かなり抑えているんです。それくらい余裕があるということです。

186

逆に、デフォルメされている部分もある。『南京！南京！』のもっとも興味深いシーンです。一九三七年十二月、朝香宮が南京に入城するとき、日本軍は中国人捕虜を皆殺しにする。トラックに乗って機関銃で掃射する。南京大虐殺の多くを占める部分ですね。朝香宮の入城は実写のフィルムが残っているので確認できますが、実にものものしい行進です。南京攻略祝賀パレードでは戦車や馬、たくさんの師団がのびりを立ててやって来る。陸川監督は実写フィルムを参考にして、忠実に再現することもできたでしょう。しかし、彼は思い切ったデフォルメをした。なんと帝国陸軍兵士が踊

りながら入城するんです。どじょうすくいや阿波踊りみたいな踊りでね。みな上半身を前に屈めて、両手をクネクネとさせながら。周りでは上半身裸の男がさらしを巻いて太鼓を叩いている。

このシーンには、中国人から見た日本という国の、わけのわからない不気味さがあらわれている。ぼくも見えて、やられたなあと思いました。なにかはっと気づかされるものがありました。つまり戦争という、日本の「男の祭り」です。祝祭、ハレ、無礼講ですね。あの整然として一糸乱れぬ暴力性、くぐもった妖気、日本の美意識は、中国人にはきつと怖いものに映ったはず。中国の若い人間から見てもわからない日本人の心性を、単に醜いものとするのではなく、踊りにして表現してしまった。しかも日本人に踊らせているんです。日本人俳優はよく抵抗せず演じきったものだと思います。このシーンは見事です。日本の映画祭でグランプリを授与したら、日中関係はよっぽど友好的になるでしょう。

187

歴史には、我々が自己申告する歴史と、見られた歴史、感じられた事実というものがある。中国人の若い人が、祖父たちから聞いたことや史料、実写フィルムを参考にして、歴史的シーンを映像で再構成した。この作業は偉大です。くやしかったら日本の若い世代もやってみよう、とぼくは思う。

資料⑩ 『南京!南京!』陸川監督来日時トークショー (1)

陸川（ルー・チュアン）監督トークショー

2011年8月21日（日）12時半～
於 なかのZERO 小ホール
主催：史実を守る映画祭実行委員会

司会：熊谷伸一郎氏（「世界」編集部、史実を守る映画祭実行委員）

熊谷：次の作品の撮影の山場を迎えて大変お忙しいところ、本日の上映会の為に2日間休んでおいでくださいました。監督は今、40歳です。大変若い監督が重いテーマを選ばれたのはなぜですか？

監督：すでに若くないと思っています。30代ならいいなど。私は大学の4年間南京にいて、南京大虐殺記念館に数度行き、このことをテーマにいつか映画を作ればいいなと思っていました。

熊谷：監督のご家族、お祖父さまなど日中戦争にまつわる経験をされているのでしょうか？

監督：私の父方の祖母は上海の人で、上海で戦時の訓練中にお祖父さんと出会って結婚しました。他の家族は直接日中戦争には関係していません。私自身、軍隊に行ったことがあります。

熊谷：自ら希望して軍隊にいらしたのですか？

監督：入った大学が軍隊の大学でしたが（人民解放軍国際情勢部で英語を学ぶ）、自ラ行きたかったわけではありません。軍の大学はすごく厳しいのです。でも、今、考えれば、そこに行った経験があったからこそ、この作品を作ることができたと思います。

熊谷：映画を作る前の日本軍のイメージは？

監督：私が受けた教育の知識の中では、日本軍は人間ではない、残虐というイメージでした。女性が裸で運ばれる写真なども見せられました。

熊谷：映画を作ることによって日本軍に対する見方は変わりましたか？

監督：映画を作るときに、友人が個人で運営している抗日博物館に通い、日本兵が撮った4万点の写真や日記や手紙を全部読んで、日本兵も人間だと思いました。戦争がなければ普通の家庭の人たちなのに、戦争で人が変わってしまうと感じました。

いろんな資料を読んで、中国人と日本人の問題ではなく、人間と戦争の問題として捉えようと思いました。あれから70年経って映画を作って、日中だけでなく、アメリカでもフランスでも、世界の各地で人間と戦争を考えて貰えればと思います。

熊谷：日本兵をリアルに描いている中で、犯罪行為に悩む姿があって、そこに監督の思いが籠っていると思いました。中国で観た人たちの反応はいかがでしたか？

監督：この映画は自分としては、日本兵の手紙と日記に沿って描いた事実なのですが、中国で上映した時の反応はすごかったです。当時の論議は激しくて、反対意見もすごく多かったです。中国の被害者は多いし、遺族はまだ生きている。恨みが激しくて受け入れられないと非難されました。

熊谷：監督はそれに対してどのように言われたのですか？

監督：当時、皆の前に出て行って論議したかったけれど、反抗が激しくて出て行けませんでした。脅迫メールなどもたくさんきました。2年後の今、皆、静かになったし、評価も良くなりました。この事件を正しく伝えることになったかもしれません。上映当時、真っ二つに意見が分かれて、支持する人も多かったのです。

熊谷：中国の若い人の対日感情をどのように見ていますか？

監督：若い人の日本に対する思いは矛盾しています。アニメや日本製の商品は好きな一方、南京のことなどあるから恨みも強い。

熊谷：国民党を描くのも中国では挑戦的なことだと思うのですが、意識して作られたのですか？（日本軍に抵抗する国民党軍の兵士が出てくる）

監督：監督としては、作品を作るからには自分のしたいことをする。回避するつもりはありません。本を書くのと同じで、いいものを作りたい気持ちが一番です。

熊谷：映画が作られて、中国で2009年に封切りされた時の状況を教えてください。

監督：2009年4月に封切られて、10日間で1億円の売上。20日間で1.7億円（約20億円）に達しましたが、論争がひどくなってストップがかけられました。（最終興収は25億円という）

熊谷：日本では2年経って、まだ商業的に興行されていません。監督としては、日本でも公開したいのですね？

監督：映画が誕生したら旅に出したい。終点は日本。今日はそのスタートとして、これからもっとたくさんの人に観ていただきたいと思っています。（会場から大きな拍手）

熊谷：今回は自主上映。できるだけ多くの日本人に観てもらって、いろんな捉え方をしてほしい。南京事件を描いているので、日本に持ってくるべき映画。もっと多くの人に観られるようになってほしいと思っています。1937年当時の日本人像を映画の中で描かれていますが、当時と今でどのような変化を感じますか？

監督：私は1937年にはいなかったのですが（笑）、現在の日本人についての印象を話したいと思っています。今、日本人の友達はたくさんいますが、心の中で3つの段階を感じています。まず、一つ。普段付き合うと優しいし礼儀正しいし、規律も守る。これは表に出てくる面です。二つ目。奥に入ると心の中に誇りを持っていると思います。三つ目。もっと奥に入ると、孤独や絶望を感じます。表面的な強さではなく弱さを感じられます。それに、一緒にお酒を呑むとすぐ酔ってしまいます（笑）。

熊谷：私も酔いましたね。監督は強いんです。

それでは、監督が会場からは是非質問を受けたいとのことですので、監督からご指名を！

資料⑩ 『南京!南京!』陸川監督来日時トークショー (2)

◆会場からのQ&A

●(男性)日本人の中には、県知事や国会議員、そして元総理大臣など、政治家の中にも南京虐殺は捏造だという人がいます。これらの考えを聞いてどのように思いますか？

- 1、無視する
- 2、映画を観てと一言う
- 3、日本のことだと、あえて何も言わない

監督：事実でないという人には、是非映画を観てほしいと思います。映画に使っているシーンは、当時の写真や、日本兵の日記、日本兵に聞いて作ったもので、全部証拠があります。それらを元に作ったものです。

ドイツとユダヤ人の関係では、戦時中のユダヤ人の虐殺を認め謝罪しています。罪を犯したら認めて謝る。それが上に立つ人の姿だと思います。

(毅然とした態度で語ると、会場から拍手が起こった)

●(女性)勝利を祝う式典で、日本兵が太鼓を敲いて踊っていて、夏祭りのような感じで描かれていましたが、このシーンの意図を教えてください。

監督：太鼓を敲いている人たちは東京から呼びました。日本の文化を映画で表現したかった。国家として、民族の文化を使って戦争へ向う人を団結させていることを表現したかったのです。ナチスもドイツ人をデモさせる時に歌などで団結させました。儀式は人間の精神的コントロールの役目を果たします。中国の歴史の中でもありました。そういう状況の中で人間は思考力があるかどうか、それを観客に考えてもらいたいと思いました。

●(男性)日本兵角川が上官の蛮行を非難するような態度を見せたが、東京裁判で、総司令官だった松井石根が、師団長らを集めて南京での兵士たちによる暴行行為を管理できなかったことに対し「泣いて怒った」との証言があったことを知った上で、角川というキャラクターを作ったのか？

(この方の真意は伝わらなかったが、監督は下記のように話した)

監督：東京裁判の資料も全部読みましたが、この作品では将校クラスの人物は描きませんでした。それには理由があります。権力を持つものは自分のやりたいことや考えを表現する場がありますが、現場で人を殺した兵士や殺された人たちは、自分で口に出して言うチャンスがない。事実として、戦争の被害を受けているのは沈黙している大勢の人たちです。(会場から大きな拍手)

●(若い人からの質問を受けたいとの監督の要望で、若い女性より)面白かったです。俳優が全員ステキでした。日本の俳優もオーディションで選んだのですか？印象は？

監督：すべて東京で、2日半かけて90数人に会いました。当時、有名な俳優を使いたいとも思いましたが、プロダクションの反対にあい実現しませんでした。でも、出演した俳優たちはほんとに素晴らしいです。中国で今とても有名になった俳優もいます。日本人娼婦役を演じた宮本裕子さんです。日本でもスターになってほしいです。

(戦争の矛盾点を一身に背負った日本兵伊田役を演じた木幡竜さんは、その後、ドニー・イエン主演の『レジェンド・オブ・フィスト 怒りの鉄拳』(9月17日日本公開)に準主役級に抜てきされている)

(記録：景山 まとめ・写真：宮崎)

CINEMA JOURNALホームページより転載させていただきました。
<http://www.cinemajournal.net/special/2011/nanking/index.html>

【「南京!南京!」解説関連サイト】

*「主権者は私たち国民」サイトより転載
<https://6719.teacup.com/syukensya/bbs/1194>

■いまだに日本公開できない『南京!南京!』警察官の
厳重警備のもと1日だけの特別上映!
<http://www.cinematoday.jp/page/N0034800>

■『南京!南京!』上映会&陸川監督トークショー
<http://www.cinemajournal.net/special/2011/nanking/index.html>

■真実が点す良心の火 映画「南京!南京!」上映
発信時間：2011-08-22 15:09:19
http://japanese1.china.org.cn/jp/txt/2011-08/22/content_23258411.htm

■映画「南京!南京!」、東京で初上映
http://japanese.beijingreview.com.cn/ztjl/txt/2011-08/22/content_385360.htm

■(上映会)当日の配付資料
<http://jijitu.com/filmfestival2011/wp-content/uploads/2011/08/shiryo.pdf>

■陸川監督 インタビュー
<http://j.people.com.cn/94478/96695/6642806.html>

■フリーライター須藤みかの「上海リアルレポート!」
新しい日中関係の契機となるか 映画「南京!南京!」
2009年07月06日
<http://trendy.nikkeibp.co.jp/article/woman/20090702/1027484/>

参考：予告編

■City of Life and Death - Official Trailer [HD]
VISO Trailers
http://youtu.be/9td_3P3w1S4

憲法を考える映画の会



〒185-0024 東京都国分寺市泉町3-5-6-303
TEL: 042-406-0502
ホームページ: <http://kenpou-eiga.com>
E-mail: hanasaki33@me.com
Facebook: 憲法を考える映画の会